

第1回「諜報研究会」

とき 2012年12月22日(土) 午後2時半開会

ところ 早稲田大学1号館401教室

演題「日本防諜から見たゾルゲ事件」

日露歴史研究センター代表 白井久也

講演の概要

①昭和の15年戦争と防諜の強化

天皇制国家・大日本帝国は、昭和初期の1930年代初め、満州事変を皮切りに、日中戦争、太平洋戦争と15年戦争の時代に突入した。日本政府は天皇制打倒を叫び、戦争に反対する日本共産党を激しく弾圧、言論を厳しく取り締まり、国民を戦争に駆り立てる戦時体制を確立した。とりわけ防諜の強化に力を入れ、国防保安法の施行など、秘密保護立法の充実を図った。

②対日諜報を重視するソ連

ソ連は自己の極東地域が、関東軍の軍事謀略、満州事変によって生まれた日本の「傀儡国家・満洲国」と国境を接するようになったため、国家安全の脅威を感じ始めた。日本語原文がないためのちに、「偽書」と言われるのだが、「田中上奏文」(田中メモランダム)の出現は、ソ連の対日警戒心を一段と掻き立てることになった。「日本は我が国を侵略するか?」。労農赤軍参謀本部の諜報機関長(同部第4部長)ベルジン大將は、日本軍部の対ソ軍事方針を探らせるため、軍事諜報員リヒアルト・ゾルゲを1933年に急遽、日本へ派遣した。

③コミンテルンの日本革命工作

「32年テーゼ」で、日本の天皇制国家機構の粉碎をスローガンに掲げたコミンテルン(共産主義インタナショナル)は、壊滅した日本共産党代表として、モスクワに駐在していた野坂参三(戦後、日本共産党議長)に対して、日本国外から日本革命の地下工作を実施する指令を発した。コミンテルンの密命を受けた野坂は、1934、36年の2回、偽造パスポートで米国に密かに潜入して、在米日系共産主義者の協力を得て、ロサンゼルスなど西海岸で、対日革命工作のキャンペーン活動を始めた。日本の領事警察は在米日系共産主義者リストを作成して、本国の治安機関に通報、日米の双方で、彼らの監視と摘発に当たった。

④ゾルゲ諜報組織「ラムゼイ機関」が発足

1933年に日本に上陸したゾルゲは、独自の諜報機関、「ラムゼイ機関」を素早く立ち上げ、「日本軍国主義」の対ソ侵略の軍事方針を探り始めた。ゾルゲの対日諜報活動は前後8年の長きにわたったが、その最大の成果の一つは、盟友尾崎秀実の献身的な協力によって、1941年7月2日の御前会議の決定、すなわち①日本は北進(対ソ開戦)せずに、②南進(米英蘭と開戦)するという「国策」をいち早く入手、モスクワに通報したことであった。スターリンはこのゾルゲ情報によって、極東ソ連軍の精鋭22個師団を西送、モスクワ攻防戦でドイツ軍を殲滅、独ソ戦でソ連が勝利を得るきっかけを作ったのであった。

⑤特高と憲兵隊の防諜活動

日本の防諜機関、特別高等警察（特高）と陸軍憲兵隊は、戦時体制の確立に伴って、「在留外国人はすべてスパイ」とみなして、その日常生活を厳しく監視する一方、帰国した前在米日系共産主義者の挙動にも目を光らせた。当然のことながら、ゾルゲもこれら防諜機関の監視の対象となった。東京の上空を飛び交う主たる「怪電波」は、ゾルゲ諜報団とモスクワの無電交信によるものであったが、日本の電波監視当局はその傍受に成功しながら、技術的にはあと一步のところまで、発、受信源がゾルゲ諜報団と特定するには至らなかった。

⑥ゾルゲ事件—伊藤律スパイ説の崩壊

特高は1941年10月、ゾルゲらラムゼイ機関の一味を国際スパイ容疑で、一網打尽に逮捕した。ゾルゲをスパイと見て、監視をしていた憲兵隊は、特高に先を越されて、顔色を失ってしまった。ゾルゲ事件の摘発は、日本共産党の再建運動に絡んで、逮捕された伊藤律（戦後、日本共産党政治局員）が特高の拷問に屈して、「米国から帰国した米国共産党員北林トモの名前を供述した」ことによるとの伊藤律端緒説が、一般に流布された。米陸軍省が1949年2月10日に発表（日本での新聞報道は11日）した「極東における国際スパイ事件の真相」（ウィロビー報告）も、1955年に開かれた日本共産党第6回全国協議会（6全協）の「伊藤律処分声明」も、伊藤律が特高に北林トモの名前を供述したことが、ゾルゲ事件摘発の端緒となったと記述している。だが、ゾルゲ事件研究者渡部富哉は、『偽りの烙印』（五月書房、1993年）で、特高は伊藤律の供述の前から北林トモを取り調べて、伊藤に彼女の名前を供述させる「罠」を仕掛けたことを暴露した。これによって、伊藤律端緒説は完全に崩壊した。渡部が暴いたこの新事実が、2000年9月25日にモスクワで開いた第2回ゾルゲ事件シンポジウムで、ウラジーミル・トマロフスキー（ロシア連邦法務局社会・宗教組織局長）が、日本の内務省警保局内部資料、すなわちゾルゲ事件摘発の「特高捜査員に対する褒賞上申書」を使って、実際の摘発が1940年6月27日から始まったとの衝撃的な報告を行ったため、客観的な歴史資料によって、実証されることになった。

⑦結びに代えて—ゾルゲ事件の国際共同研究の進展

ゾルゲ事件は、日本の特高が防諜のため、今から71年前の1941年に摘発した古い国際スパイ事件である。しかし、ゾルゲ事件については、内外の諜報・治安機関に今なお秘匿されている関係資料が全て公開されたわけではなく、いまだにその謎が完全に解明されたとは言い難い。このため、日露歴史研究センターは、内外の主だった研究機関や研究者に協力を呼び掛けて、ゾルゲ事件の国際的な共同研究を推進している。今後、こうした研究動向がうまく発展して実を結べば、これまで地下に埋もれてきた歴史史料の発掘も可能となる。そうなれば、日本や世界の近現代史に、深い関わりのあるゾルゲ事件の謎の解明が、一段と進むことになろう。

白井久也（しらい・ひさや）の略歴

1933年、東京に生まれる。58年に早稲田大学第1商学部を卒業後、朝日新聞社に入社。経済・外報記者を経て、75-79年の4年間、モスクワ支局長。帰国後、編集委員（共産圏担当）。93年に定年退社。94-99年、東海大学平和戦略国際研究所教授。現在は、日露歴史研究センター代表、学校法人杉野学園理事。著書に『ゾルゲ事件の謎を解く—国際諜報団の内幕』（社会評論社、2008年）のほか、ゾルゲ事件関係の編著書、論文、翻訳多数。